

Title	Pietas et Scientia : 聖学院大学教職員研修会(2003.7.1 於大磯)での講演
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume19, 2003.12 : 141-144
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3218
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

Pietas et Scientia

— 聖学院大学教職員研修会（二〇〇三・一・七 於大磯）での講演 —

大木 英夫

昨年の新年教職員研修会では、二〇〇一年九月一日の事件の衝撃を覚えながら、二二世紀の問題を考えた。今年も現代文明の問題を考えさせるような衝撃、ある意味ではもっと深刻な衝撃の中でこの会が開かれる。二〇〇二年末にクローン人間誕生という（ラエリアンなる団体発表の）ニュースが入ってきた。一九六六年にジュネーヴでわたしは、ハーヴァードの学者メッサニーが「月に人間が着陸できることになることは何も驚くことではない、もしそれができなければ驚くであろう」と言うのを聞いて驚いた。というのは、わたしは、梅原猛のような日本的な自然の思想をもって、その会議にのぞんでいたからである。「クローン人間が誕生しても何の驚くことはない、それができなければ驚くということであろう」というべきか。クローン羊ドリーが造られた、そこまではメッサニーの言葉は当てはまる、しかしそれが人間にまで手をのびしだす。これは、寅さんの言い方では「それ言っちゃ、おしまいだよ」というような言葉ではないか。これは現代文明における真に重大な問題である。重大問題となる。「アパテイア」（無感動）は古代では知識人の美德であった、しかしそれは現代では知識人の悪徳であろう。

わたしはむかし渡辺格という有名な分子生物学者と一九七〇年に中央公論で対談したことがあった。この人は『人間の終焉』という本を書いた。彼はわたしの終末論に興味をもった。この学者は、人間の問題に決して無感動

ではなかった。分子生物学の行く末に人間の終焉を感じ取っていた。それから三〇年もたった。

この出来事は、思想的に見れば、フランス革命として爆発したフランス啓蒙主義の帰結といえることができる。ラエリアン運動なるものが、一種の宗教として登場したこともフランス啓蒙主義に似ている。それは単に科学的発展というのではなく、それは疑似宗教性を帯びているからである。ラエルは教祖である。フランス革命のとき、「人間と市民の権利宣言」が載った新聞に「蒙昧の雲を吹き払う理性の最高の光」という言葉が掲げられた。理性は最高存在の発現であり、理性の神聖化が起こり、シャン・ド・マルスでは「最高存在の祭典」が挙行された。その新聞に「蛇がみずからの尻尾をくわえている絵」があつたことに、カール・バルトは注目した。この絵のもつ象徴性をバルトは解説する。国王絶対主義から民主主義的絶対主義、それをナポレオンの帝政が象徴するような絶対主義への転回の象徴と解説した。しかし、民主主義的絶対主義というよりは、理性主義的絶対主義と言った方がよい。理性絶対主義の蛇が自分の尻尾をくわえた、フランス革命から約二百年たつて、それはクローン人間の問題となる。二つの世界大戦の悲劇の大杯を飲み干して大蛇となつたか、今や理性絶対主義の人間が、これまで人間として越えてはならないはずの一線を越える。この理性絶対主義をラエルは「エロヒム化」(エロヒムは神の名)の過程と呼ぶ。人間神化の過程である。人間をもドーリー羊のようにつくり出す。しかし、人間をつくり出すことによって、その主体の客体化が終着点に達する。人間は、科学によってすべてを対象化し、そのメカニズムを研究し、科学技術の発展という壮大な近代的迂回路を通じて、ついに人間自身を囓む、あのフランス革命時代の絵が現実化する。クローン人間の問題は、フランス的啓蒙主義の問題の究極的な暴露となつていく。

*

近代化を考えると、イギリス革命とフランス革命を区別することが重要であることを総合研究所の研究活動は

主張してきた。どう違うか。イギリス革命（一六四九年）は一七世紀、フランス革命（一七八九年）はそれから約一四〇年後のことである。年代も状況も違う。しかしもつと重要なのは革命の性質が違うことである。その違いを「理性」の理解に見ることができるといえる。イギリス革命のときの思想家ミルトンは、「理性は選択である」という命題を提示した。それは『アレオパギティカ』にも『楽園喪失』にも出てくる。「理性は選択である」ということは、デカルトの「コギト」、「理性は思惟である」ということと違う。もし「理性が選択である」ならば、羊クローンから人間クローンへと踏み出すとき、そこに選択が入る、できるとしてもしないという選択である。そこに科学の背後から「倫理」が前面に出てくる。その選択において現代の知性は深い意味での理性批判の課題をもつ。もし「理性が選択である」ならば、理性はその選択によって理性の中に含まれている自由の要素を開示するからである。「理性は選択である」ということは「理性を選択することでもある。理性を選択することとは、自由が理性の外にあるだけでなく、その外背後に背後にあるのでもなく、その外上にあるということである。

理性と自由とが区別されることによって理性と自由との関係が問われることになる。理性と自由を単純に同一化すべきではない、理性を別に用いる可能性をも見いだす。そのことは、理性に対して、人間存在の「神秘」についての二つの態度決定を提起する。だれも遺伝子解読あるいは生殖メカニズムの解明できたことで、人間存在の「神秘」を説き明かしたということとはできない。神秘に対して理性のとる態度は、理性をどう用いるかという自由の問題となる。そのとき自由は倫理問題をもつのである。啓蒙主義的理性は、神秘を究明しようとする。しかし、自由は、別の態度決定を可能にする。神秘に対して畏敬をもつという態度である。人間の理性をどう用いるかということとは、それ自体理性の問題ではなく、自由の問題、倫理の問題である。なぜ最近倫理の問題が、近代科学のいわば行間の割れ目から噴き出したか。たしかに人間にとって一番興味ある研究対象は人間である。そして人間の科学的

研究はついにクローン技術に至る。神秘に直面して理性は傲慢になるか、それとも謙遜になるか、それが自由の問題となる。

聖学院大学のスローガンは *pietas et scientia* (敬虔と科学) である。*pietas sive scientia* (敬虔か科学か) という二者択一ではない。近代理性は、この二者択一をもって「敬虔なき科学」となった。それがクローン問題として出てくるのである。フランス啓蒙主義が「敬虔なき科学」の道を選んだことは、ひとつの、しかも不幸な近代的選択であった。理性の蛇は、自分の尻尾をくわえ出し、それを呑み込むことによって、ついに自滅に至るであろう。聖学院大学は *pietas et scientia* というスローガンを、近代文明の中にある理性と自由の単純な同一化のもたらす弊害、いや災害を見抜いて、文明の危機に取り組む旗印として掲げたのである。

なぜ *pietas et scientia* でなければならないか。それは聖学院大学の二十一世紀に向かう立場を示し姿勢を決定するからである。第三ミレニアムは、その冒頭から、この巨大な不幸な円環があらわれたからである。理性絶対主義の大蛇が自分の尻尾をくわえ出したからである。クローン問題が現れ出したときこそ、聖学院大学は、真剣にその危機に対処すべくみずからの立場と姿勢を明確化しなければならない。「真理は自由を得させる」、「真理」の偽札がコピー機から溢れ出す。そのとき「本物」がなければならぬ。聖学院大学がその文明の運命に転換を与えなければならぬ。それが聖学院大学の *pietas et scientia* への決断である。今日の大学の実状を見よ。それはクローンを造る工場のようになってきたのではないか。聖学院大学の存在理由は、文明の再生を人間の再生から始めなければならないことを知っている新しい時代のための新しい大学であり、そしてその教育と研究をもって、人間の自由が真に回復され、新しい時代にふさわしい新生する次世代の人間を育てる *alma mater* (母校) となることである。